

## 山下画廊

釘町 彰展

## 循環する生命、流転する時間



「Eclipse (bleu)」2015年 80×80cm 雲肌麻紙に墨、胡粉、天然岩絵具

新シリーズの「eclipse」を発表する釘町彰。このシリーズは昨年の初夏、アムステルダムでのキューケンホッフ公園で見た自然がきっかけとなって始まった。

「チューリップで有名なこの公園は、樹齢を経た樹木が多く茂っています。その時なぜか足下のチューリップではなく、頭上の青空ばかりを見ていました。そうすると、様々な種類の

樹々のシルエットが目に入って来る。視点を少し変えるだけで、普段はただ樹木として見ている形が、ポロックのオールオーバーなドリッピングやクリフォード・ステイルの亀裂あるいは夜空の稲妻のような模様に見える。その発見に新鮮な驚きを感じて、様々なアングルで何枚も写真を取り、スケッチをしました。」

自然が偶然に作り出す抽象的な模

様をモチーフにすることは、前回の「Snowscape」然り、釘町にとってめづらしいことではない。

樹木のシルエットにインスパイアされた釘町だが、それだけでは物足りず、自分と天空との距離感を表す「サイン」を求め、そこで思いついたのが、数年前フランス北部で見た皆既日蝕だった。

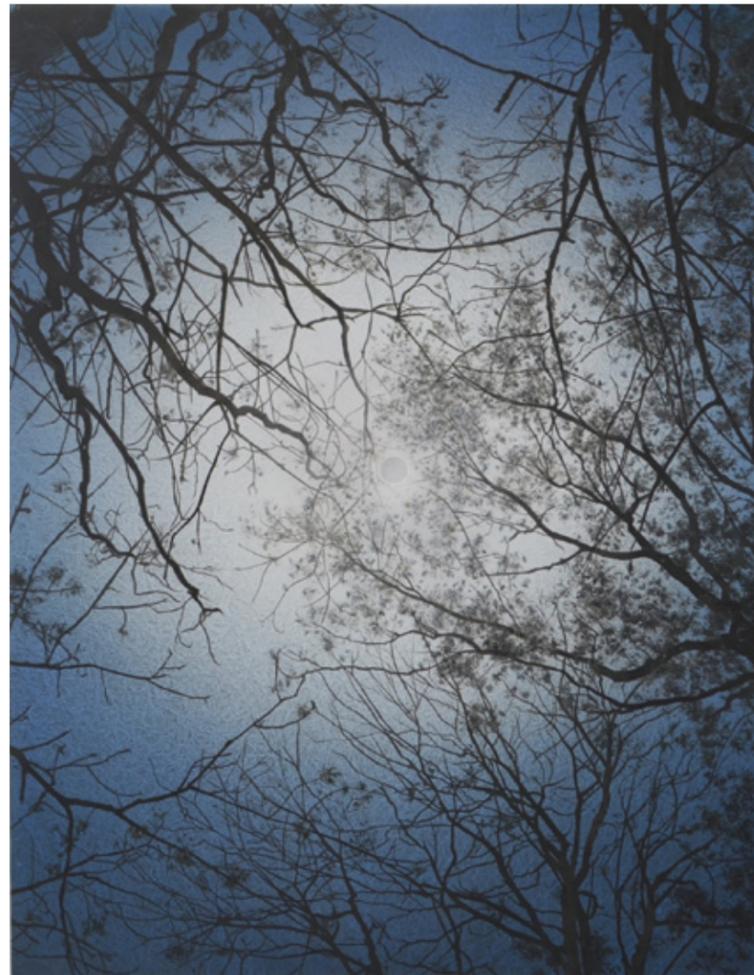
「その自然現象と樹木のシルエットを重ねると、アブストラクトな開放感と同時に写真による具象的な密度があり、それでいてミニマルなひとつの光や距離を感じさせられる。さらに我々人間の存在理由、あるいは立ち位置に対する疑問提示、すべてを同時に表現できて面白いと思ったんです。」

四方から伸びてくる樹木の枝の動きは、太陽に誘引されているようだ。それは天体の運行が地球と連動し、エネルギーを交流させていることの暗示でもある。

「周知の通りほとんどの生物は、生まれると上へ向かって成長し、死んだら土に帰ります。僕は生の謳歌というより生の循環を表したい。人生には紆余曲折があるけれど、大きな視点でみればひとつの光に包まれている。そう捉えることで、儂い人生を生きている我々は、今の一瞬を愛おむことができるのではないだろうか。」

日蝕というドラマティックな宇宙の営みは、生から死、そして再生へと向かう生命の循環を釘町に直観させたのに違いない。抽象的な模様の中に人智を超えたものを認識し、ひとつのヴィジョンとして成立させる。その鋭敏かつ知的な感性こそ、釘町の稀少な才能と言える。

制作のプロセスは至って緻密だ。これまでの「eclipse」シリーズと同じく、墨の下地に揉み紙を施し、その上に胡粉の薄い層を何十回も重ねて下地を作る。今回はその上に、さらにパソコン上で徹底的に構図を練った樹木の形を忠実に描くのだが、修行僧のごとくストイックな作業を



「Eclipse # 1」2014年 65×50cm 雲肌麻紙に墨、胡粉、天然岩絵具

進めるうちに、作家自身の自我は滅却されてゆく。

「自分を忘れる、ということは私の作品に通底するひとつのテーマです。人間というのは元々エゴが強い生き物ですから、己を空しくする、そこから遠くの存在や空間を想像することで、逆に自分の立ち位置や様々なことが見えて来ると思っています。」

もはや誰の手によるものなのか意識させない画面。それを見て我々は宇宙という大きな存在を感じ、同時に内面にある小さな宇宙と向き合うことになる。

最近では、この揉み紙の手法を立体作品としても取り組んでいる。

「水張りをする前の、揉み紙をした瞬間の和紙がたどろんと転がっている様相を面白いと感じていました。なかなか作品化できずにいました。今になって和紙の揉み紙をそのまま提出するのではなく、3Dプリンターを使って全く別の素材に移し替えて作り直すというアイデアに至りました。そこに金箔を施して、宇宙から飛来した隕石のような、ある違う次元の物体に昇華させたい。」

「私の作品に共通する基盤は、自然プロセスの作用をそのまま作品に定着させ、『見立て』ることです。今度の立体もその延長線上にあります。それはある意味でデュシャンの「レ

ディメイド」に近く、そしてそれより以前では、実はすでに利休がやっている手法ともいえます。」

eclipseシリーズの多くは、モノトーンの上に神秘的なブルーの諧調がほどこされている。それは夜(闇)と昼(光)とが融合したような、神秘的な色調である。

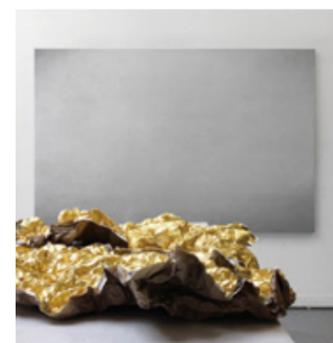
「最高峰の芸とは、(夜半の太陽)だ」と世阿弥は言っています。つまり夜の太陽という完全な矛盾が芸の行き着く処だと。考えてみれば昼の光があっても、宇宙へ飛び出せばそこは暗黒の空間です。夜とか昼という概念も、人間の小さな知能が作つたに過ぎず、宇宙は遙かに深くて謎に満ちています。ひと言で言うならば、そういった我々の知能を超えた何かを表現したかったのです。昼と夜、そしてオールオーバーな抽象写真をもとにした具象、モノクロームの色面として捉えるミニマルアートの手法。それらすべてを結合させ、最終的に「空」という東洋的な価値観をベースにした作品に結晶化させたい。」

目指すものが壮大であればそれだけ、芸術家としての冒険はスケールが大きくなる。世界は文明化が急速に進み、自然が破壊され続けることで、宇宙の一部である我々の力は衰えてしまっている。このような危機的な時代に生きる我々は、自分の魂が本質的にコミットできる対象を本能的に求めるのではないだろうか。釘町の作品は個人を超え、いま時代にも必要とされている。

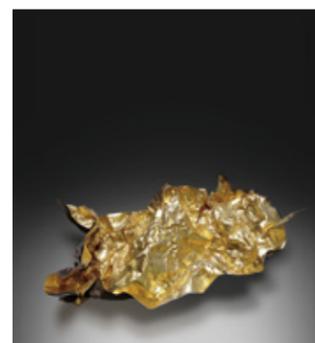
(編集部)

## Akira Kugimachi

1968年神奈川県生まれ。ベルギーに育つ。95年多摩美術大学大学院修士課程絵画科日本画専攻修了。95～96年マルセイユ国立美術学校。99年度パリ第8大学大学院メディアアート科修士課程修了。文化庁在外派遣芸術家としてパリに滞在後、国内外のギャラリーやスペース、美術館等で個展、グループ展発表多数。また建築とのコラボレーションによる作品恒久設置や立体等、様々な領域にその表現活動の場を広げている。現在パリ在住。



「Meteorite」立体(マケット) 特殊雲肌麻紙、金箔



「Meteorite」立体(マケット) 特殊雲肌麻紙、金箔 H25×W75×D60cm

現在、検討中の立体作品。和紙の揉み紙を利用し、金箔を施したもの。偶然から出来た物質を「宇宙から飛来した隕石のような」物体に見立てる。